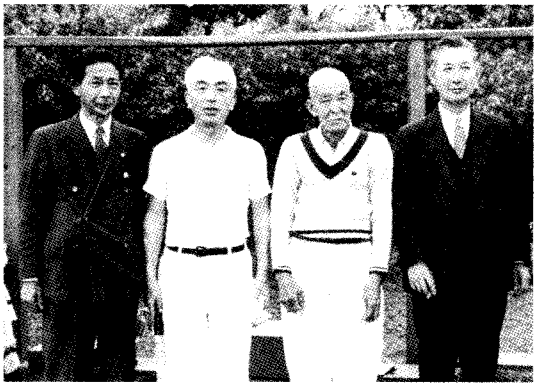
三井テニスの歴史

三井のテニスの歴史を運営形態の観点から見ると、明治中頃から大正中頃までの三井各社ごとにテニス同好者が集まって別々にテニスを楽しんでいた個別同好会時代と大正後半から現在まで続く三井グループとしての各社による共同運営クラブ時代に区別される。

日本のテニスの夜明け時代に、三井の最初のテニスプレーヤーとして個別同好会時代を切り開き、その後に続くクラブ組織時代を築き上げた三井のテニスプレーヤーの原点であり象徴的存在であったのが、小脇源治郎氏（三井物産，慶応3年生，昭和29年没，享年89歳）であった。そして、小脇氏に続く多くの三井のテニスプレーヤーの活躍を積極的に支援されたのが三井家の皆様と松平康邦様（三井合名／三井不動産）であった。



第1回小脇杯　昭和28年浜田山テニスコート
左から松平様、清水氏、小脇翁、三野村氏

1. 個別同好会時代
（明治中頃から大正後期）

1.1 三井テニスの祖「小脇源治郎翁」

小脇源治郎氏は幕末の慶応3年（1867年）生まれで、親戚が英国に居られ幼少の頃から西欧文化に触れられていた。「小さい時からテニスが好きで明治7～8年頃に神戸の小野浜で外人のプレーを見たことを覚えている。」と語られており、これが小脇氏のテニスとの最初の出会いであった。早くにお父様を亡くされ「親戚が居られる先進国の英国に行ってみたい」との一念から第一高等中学在学中の明治24年に単身でフランス船に乗り込み英国へ留学。5年間の英国滞在中に英国流のテニスを本格的に習得された。英国滞在中に三井物産ロンドン支店より入社の誘いを受け、帰国後の明治29年（1896）3月に三井物産に入社し、三井のテニスプレーヤーの先駆者として、三井のテニスの普及と発展に尽力された。

この時代の三井のコートは、明治29年10月に地鎮祭が行われ明治35年11月に完成した旧三井本館（通称「赤煉瓦ビル」の建設期間中に2面が臨時に造成された。又、明治32年には、当時三井家の迎賓館であった宮殿式和風平屋建ての有楽町三井集会所の中に、ローンコートが造成された。小脇氏は、これらのコートで永坂町家第8代三井守之助高泰（たかやす）様や三井物産のテニス仲間とテニスを楽しまれていた。

小脇氏は明治40年に小石川家第8代三井三郎助高景（たかかげ）様、益田孝氏（三井物産初代社長）の欧米視察、更に大正14年（1925）に小石川家第9代三井高修（たかなが）様の欧米視察に随行され欧米各国のテニス事情を研究。帰国後には日本庭球協会の会務を委嘱されて、日本のテニスの普及に尽力された。

小脇氏より1歳年上で明治13年に米国に留学され15歳の時に日本人で最初にテニスをプレーされたと言われている樺山愛輔氏は、三井グループの日本製鋼所設立（明治40年）に尽力され、亡くなられるまで（昭和28年10月）同社の会長・相談役等を歴任されていたが、日本製鋼所が三井直系の会社でなかった為、この当時の三井のテニスの記録には残念ながら見当たらない。

大正3年に戸越の三井戸越別邸内に三井農

芸試験場（通称「戸越農園」）が開設されるとテニスコートが1面造成され、大正6年には、東中野の藤村義明氏（三井物産上海支店長）邸内にクレーコートが2面造成され、テニスが三井の人々の中で次第に普及し始めた。

三井高修様は米国へ留学され、大正6年にニューヨーク三井物産へ入社。本村町家第2代三井弁蔵（べんぞう）様も同様に渡米されニューヨーク三井物産へ入社。この米国生活にてテニスを大いに楽しまれた。

大正11年に三井弁蔵様は米国から帰国後、桜新町の邸内のクレーコート（1面）でテニスを楽しまれていた。栄子（さきこ）夫人は女子のテニスとゴルフの先駆者であった。三井高修様も米国から帰国されると小石川伝通院の邸内のクレーコート（2面）でテニスを楽しまれていた。

1.2 第1期黄金時代

大正時代に入ると、三井物産へ後にデ杯選手となる清水善造氏（入社大正元年）、柏尾誠一郎氏（同大正2）、岡本忠氏（同大正6）、鳥羽貞三氏（同大正13）の4名が次々と入社した。

清水善造氏は入社後直ちにインドのカルカッタに赴任となった。大正2年1月に開催された第33回ベンガル選手権において軟式の名手であった清水氏は、硬式テニスの練習が僅か3ヶ月間にも拘らず優勝を遂げ当事のインド在住の日本人を驚嘆させた。大正9年6月に、ウィンブルドンで世界No.1のチルデンに敗れたもののオールカマーズ（チャレンジラウンド進出者を決める試合）準優勝。更に、大正10年8月にボストンで開催された日本初参加のデ杯では、清水善造氏、柏尾誠一郎氏及び熊谷一彌氏（三菱銀行）が選出され、清水氏と熊谷氏の活躍により強豪の豪州を破りチャレンジランドに進出する大快挙を成し遂げ、Mr.Dwight Davisよりプレートを追加したカップの記念写真が贈られた。米国には惜敗したものの、日本のテニス界に一大センセーションを巻き起こした。

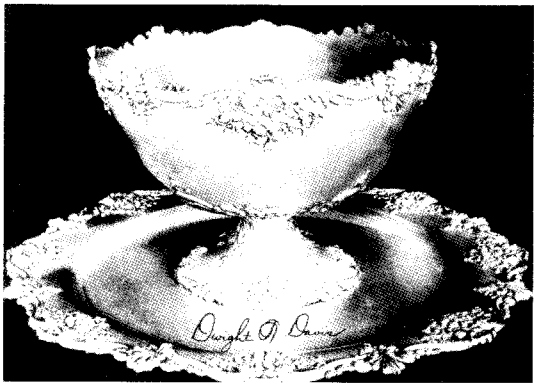
デ杯参加にあたり、日本庭球協会の設立に尽力され、初代会長となられたのは朝吹常吉氏（帝国生命、三越社長）であった。

このような状況下、当時の摂政宮殿下（昭和天皇）も大いにテニスにご興味を持たれ、清水氏・岡本氏・鳥羽氏らによる初の御前試合が、大正10年12月17日に各宮家、朝吹常吉氏、三井高修様、三井守之助様他の三井関係者列席の下、皇居内コートにて行われるという栄誉に浴した。更に、大正11年5月6日には新宿御苑コートにて熊谷氏（三菱合資、米国駐在から帰任）、鳥羽氏らによる御前試合が行われた。

大正12年から昭和3年までは毎年三井グループからデ杯選手が選出されるという三井のテニス第1期黄金時代であった。

清水　善造氏　6回（大正10～昭和2）
柏尾誠一郎氏　2回（大正10，12）
岡本　　忠氏　1回（大正13）
鳥羽　貞三氏　3回（大正15～昭和3）
川地　　実氏　1回（昭和6）

注：大正11は清水氏帰国のためデ杯を棄権



Mr.D.Davisから贈られた記念写真

2. 共同運営クラブ時代
（大正末期から現在まで）

2.1 戸越ローンテニス倶楽部
（大正14年～昭和10年）

このようにテニスは急速に普及し始め、三井グループとして大規模なテニスコートを持つ機運が小脇源治郎氏を中心とする三井物産を始め各社に高まり、三井家のご決断により合名／銀行／物産／鉱山／信託／東神（倉庫）の参加会員会社6社による費用平等分担方式（信託/東神は当面負担免除）によるクラブ組織である戸越ローンテニス倶楽部が大正14年4月3日に発足した。

ここに、三井グループの共同運営方式によるクラブ時代の幕開けとなった。

大正13年には松平康邦様が三井合名に入社され戸越ローンテニス倶楽部の委員に就任された。

昭和3年（1928）に第1回三井物産社内東西対抗戦が戸越コートにて開催され、昭和7年12月4日には、小脇氏の長年に亘る三井グループのテニス発展への尽力を記念して小脇氏記念庭球紅白試合が戸越ローンテニス倶楽部主催にて開催された。

小脇氏記念庭球紅白試合　昭和7年　戸越コート
（前2列目右から10人目が小脇氏）

2.2 浜田山ローンテニス倶楽部
（昭和10年～現在）

2.2.1 戸越からの移転

ところが、突然都市計画の発表により戸越からの移転を余儀なくされる事態となった。かかる状況の下、三井合名による三井グループ総合グランド建設という構想に発展し、駅前の立地条件の良さと美しい高麗芝の庭と山谷がある浜田山を、北家（総領家）第10代三井八郎右衛門高棟（たかみね）様の大英断により昭和8年に約3万坪の土地を購入した。当時の浜田山は駅前に民家が4，5件しかなく、一帯は開墾されて開けておりグランド造成には最適の場所であった。

グランド造成は直ちに開始され、戸越の都市計画により一番先に浜田山へ移転する必要があったテニスコートの造成が優先された。運動施設の設計は各社の専門委員が行う方式を取り、テニスコートは三井鉱山が担当となり、当時の戸越ローンテニス倶楽部キャプテンの三井高修様（鉱山取締役）と川地実氏（鉱山労務部）が設計を担当された。又、テニスコートの周辺及び運動場全体の緑化は、松平康邦様と芝の造詣が深かった三井合名の島田勝之助理事が中心となって行われた。

戸越ローンテニス倶楽部の伝統と思い出を新天地の浜田山へ引継ぐ思いから、戸越ローンテニス倶楽部で使用していた休憩所や倉庫の建物等はそのまま浜田山へ移転された。

2.2.2 テニスコート開き

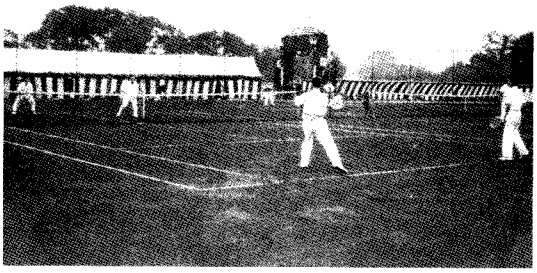
昭和10年春にテニスコート9面と休憩所が完成し、グランドの正式開場に先立ち、戸越ローンテニス倶楽部発足日にあたる4月3日に浜田山開庭記念紅白試合が小脇源治郎氏を囲んで開催された。この当時は、倶楽部の名称は戸越ローンテニス倶楽部のままで、会長は三

井弁蔵様、副会長は阪井徳太郎氏（三井合名理事）、キャプテンが伊皿子家第9代三井高長（たかひさ）様と三井高修様であった。

昭和10年12月19日に倶楽部名称が現在の浜田山ローンテニス倶楽部に改名された。

昭和11年11月1日にテニスコート11面・野球場・陸上競技場（400m）・ボーリング場・クラブハウス等の施設を有する三井グループの総合グランドである三井上高井戸運動場の開場式典が北家（総領家）第10代三井八郎右衛門高棟様、同第11代三井八郎右衛門高公（たかきみ）様ほか各三井家の皆様並びに松平康邦様のご臨席の下、盛大に開催された。尚、当日は、テニスコートを含む各施設にて運動会等の様々な催物が行われた。

その後もテニスコートは増設され、昭和16年までには、テニスコート12面、テニス・バレー兼用コート1面、板打場が完備され、ほぼ現在の姿の浜田山テニスコートが完成し、三井グループによる共同運営クラブ時代の第2幕となる浜田山ローンテニス倶楽部の時代となった。



上高井戸運動場開場式典の松平様（右から2人目）昭和11年

2.2.3 戦時農園化とコート復活

このように整備されて来た浜田山にも昭和12年からの日中戦争、昭和16年からの太平洋戦争突入という戦時体制の波が押し寄せ、昭和18年には陸軍気象部により三井上高井戸運動場が接収されることになり、芝生は茂原の海軍飛行場へ献納、ポール等の金属類は供出され、浜田山テニスコートは戦時農園と化した。

昭和19年に設立された三井本社は戦後のGHQによる財閥解体命令により昭和21年に解散、三井物産も昭和22年に解散となった。三井物産解散前の昭和22年春頃より、三井物産等の同好者が浜田山コートでテニスを再開し始めたが、農地解放問題があり浜田山コートの本格的な復活は遅れた。昭和24年に杉並区農地委員会により農地買収除外が正式に決定され、昭和25年にテニスコートを含む上高井戸運動場の全面整備が1年をかけて懸命に実施され、テニスコート11面、バレー兼用コート2面の計13面の新生浜田山テニスコートが復活した。しかしながら、戦後の物資不足の影響で、ポールは木製であった。

2.2.4 浜田山ローンテニス倶楽部の正式発足

浜田山ローンテニス倶楽部は昭和10年12月19日に改名されたものの、その後軍国化の影響で正式発足がないままに活動が事実上停止状態になっていたが、サンフランシスコ講和条約が締結された昭和26年の4月21日付けにて正式発足となり、日本庭球協会の加盟クラブとして登録された。初代会長には松平康邦様が就任、発足時の常任幹事会社（7社）の委員は以下のとおりである。

三井鉱山株式会社	林田　春喜氏
株式会社帝国銀行	高橋　土四男氏
神岡鉱業株式会社	堀　愛生氏
東京信託銀行株式会社	安見　三喜男氏
中央生命保険相互会社	景山　積正氏
三井化学鉱業株式会社	田中　穣二氏
三井不動産株式会社	三浦　繁氏

2.2.5 テニス大会の開始と変遷

昭和26年に第1回ダブルス大会と第1回シングルス大会がまず開催された。昭和27年には第1回各社対抗が開催され、昭和28年には小

脇源治郎氏の喜寿を祝して、合計年齢満88歳の小脇杯ダブルス大会が開催された。そして財閥解体により分割されていた三井・三菱の会社は戦後の経済復興の中で統合・合併が行われ、昭和30年には第1回全三井・全三菱テニス大会が開催され、現在の浜田山ローンテニス倶楽部主催の大会体制が整った。

昭和31年からは女子ダブルスが参加、昭和33年から女子シングルスが参加、昭和37年から小脇杯に女子が参加（20歳ハンデ）、小脇杯の合計年齢が昭和57年から満100歳、平成5年から満110歳、平成9年から満120歳に変更、平成元年からダブルス・シングルス大会にシニアクラス（満50歳以上）が創設、平成7年から各社対抗にA・Bブロック制が導入された。

平成2年に亡くなられた松平康邦様のご尽力を記念して平成3年からは、ダブルスのシニアクラスが松平杯となり現在に至っている。ご子息の松平邦敬様には毎年松平杯授与の為、浜田山へ来て頂いている。

小脇源治郎氏の米寿のお祝いとして始まった小脇杯は、昭和30年1月に小脇氏が亡くなられてからは、ご子息の小脇博通氏（故人）に続いて、ご令孫の小脇康夫氏に毎年小脇杯授与の為、浜田山へ来て頂いている。

昭和26年から順次始まった各大会は、平成17年には第55回シングルス大会、第55回ダブルス大会、第54回各社対抗大会、第52回小脇杯ダブルス大会、第51回全三井・全三菱テニス大会を迎えるに至る。

2.2.6 第2期黄金時代

昭和29年の第29回全日本選手権ダブルス優勝ペアーの宮城淳氏・加茂公成氏（シングルスは宮城氏が優勝。加茂氏は準優勝）が昭和30年4月にゼネラル物産と三井物産に入社した。翌5月に日本（東京田園コロシアム）で初めて開催されたデ杯東洋ゾーン決勝戦では、両氏の大活躍によりフィリピンを3—2（シングルス3—1、ダブルス0—1）で降してデ杯インターゾーンへ進出した。同年8月にニューヨークで開催されたデ杯インターゾーン準決勝では豪州に残念ながら敗退。しかしながら敗退直後（同8月）の第75回全米ダブルス選手権では決勝戦で米国のモス・キリアン組を6—2、6—3、3—6、1—6、6—4で見事破り、世界の四大大会（全米・全仏・全英・全豪）で日本人初優勝という日本テニス界の金字塔を建てた。

宮城・加茂組は昭和29年から31年まで全日本ダブルス選手権3連覇。宮城氏は、昭和27年から38年までに10回、加茂氏は昭和28年から34年までに連続7回、デ杯選手として活躍した。

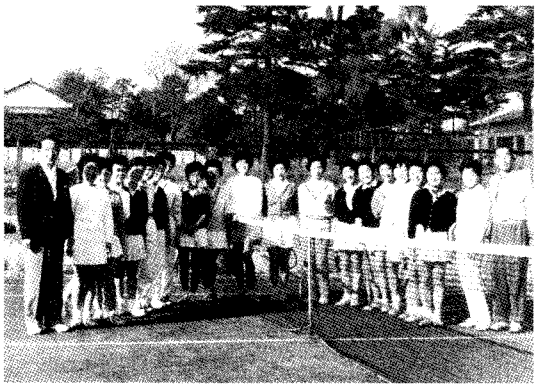
昭和32年には柴田善久氏がゼネラル物産へ、昭和34年には松浦督氏が三井物産へ入社した。昭和34年のデ杯は宮城氏、加茂氏、柴田氏、松浦氏の4名全選手が三井グループから選抜され、三井のテニス第2期黄金時代が到来した。

2.3 北友テニス倶楽部

浜田山ローンテニス倶楽部とは別に、戦前から戦後の昭和30年代後半までの間、三井高公様のご高配により、港区麻布笄町の別邸内に高公様の私的テニス倶楽部である北友テニス倶楽部（6面）が設けられ、このコートでも盛んにテニスが行われた。三井総領家が北家と呼ばれていることから北友テニス倶楽部と呼ばれていた。北友倶楽部会長は、三井物産退職後の昭和12年3月16日より高公様の家扶事務取扱を嘱託されていた小脇源治郎氏が務められた。戦前は三井家関係者のみにプレーが限定されていたが、戦後は一部外部関係者の方も交えてのプレーがされた。昭和36年12月24日には浜田山ローンテニス倶楽部と北友テニス倶楽部の対抗戦が開催されている。

この時の浜田山側代表者は松平康邦様で、北友テニス倶楽部代表者は大浦康信様（松平

康邦様の実弟）であった。



浜田山と北友の対抗戦　昭和36年12月　笄町コート

2.4 松平康邦様とテニスと園芸

松平康邦様は越前松平家第18代松平康荘卿の次男として明治32年に生まれ、大正13年に三井合名に入社された。学生時代は野球をされ、三井合名入社後にテニスを始められたが、後に「テニスをやっていて本当によかった。」と語られるほどテニスに熱中され、浜田山ローンテニス倶楽部の会長・名誉会長並びに日本テニス協会の役員を長年務められ日本のテニス界の発展に大いに尽力された。

又、松平様は父君の康荘卿が明治中期に英国王立農業学校に留学され、日本の農業近代化に尽力され東京農業大学を創立されたことから、高等師範付属小学校から東京農業大学へ進学された。園芸に極めて造詣が深く海外原産の様々な植物を日本へ導入され、昭和天皇の園芸のご相談役もされていた。

浜田山の樹木の選定と配置は、グランド造成時から松平様が直接ご指導され、海外からの珍しい植物を入手されるとご自宅の庭でまず育てられ、うまく根付くような植物は浜田山に植林されテニスをしながら四季折々の花が楽しめるようにされた。松平様は浜田山を「我がいのち浜田山」と称されていた。

2.5 浜田山閉鎖

昭和10年にテニスコートが完成し戦中・戦後の混乱期を乗り越え三井グループの人々に愛されてきた浜田山も平成バブル経済の破綻を境に利用加盟会社の脱会が急激に進み、平成17年9月末を以って浜田山テニスコートは閉鎖される事態に至った。

これにより、70年（戸越時代を含めると80年）に亘った三井グループによる共同運営クラブ時代は幕を降すこととなった。

浜田山のテニスコートは誠に残念ながら無くなるものの戸越時代からの三井のテニスの長い歴史と伝統を後世に引継ぐ為に浜田山ローンテニス倶楽部の組織は維持することとし、平成18年以降の活動方針を浜田山ローンテニス倶楽部委員会にて検討中である。

（文責：三井造船　手島　宏）

参考文献

「三井不動産社内報 S55～S58　松平康邦様連載寄稿 “我がいのち浜田山”」
「三井物産ノテニスノ歴史　H2　千浦太郎著」
「三井不動産40周年史」
「三友新聞」

【浜田山ローンテニス倶楽部規約】 H17年9月

第1条　名称

本倶楽部は浜田山ローンテニス倶楽部（以下「倶楽部」という）と称する。

第2条　所在地

倶楽部は東京都杉並区高井戸東1丁目31番19号に置く。

第3条　目的

倶楽部の目的は以下のとおりとする。

会員の円滑なテニスコート利用の促進
会員相互の親睦
会員の技術の向上と体力の増進
健全なスポーツとしてのテニスの普及

第4条　会員の種別

正 会 員　加入会社の社員のうち倶楽部に入会した者
家族会員　正会員の配偶者、親、子および同居の兄弟
特別会員　現加入会社の元社員等で、加入会社の人事担当責任者の承認を得て、三井不動産（株）の承認を得た者
名誉会員　本倶楽部に特別の功績があり、幹事会の推薦した者

第5条　事業

倶楽部は下記の事業を行う。

1. 倶楽部主催の庭球大会
   小脇杯庭球大会
   全三井各社対抗庭球大会
   全三井シングルストーナメント
   全三井ダブルストーナメント
2. 対外試合
   全三井・全三菱テニス大会
3. 招待試合
   優秀選手の招待試合
4. 初心者の指導・育成のためのテニススクール等の開催

第6条　利用可能日

会員並びに役員は運動場定休日及び年末年始休業日を除く全ての日に利用できる。

ビジターは運動場定休日及び年末年始休業日を除く平日に会員同伴により利用できる。

第7条　大会・対外試合の特例

大会・対外試合については別紙1（省略）に定める会社・学校・機関に属する者に限り利用を認める。平日に限り、会員1名につき原則3名までのビジターの利用を認める。

第8条　ビジター

平日に限り、会員1名につき原則3名までのビジターの利用を認める。

第9条　常任幹事会社

加入会社及びビジター会社の中から倶楽部の運営・利用のため、常任幹事会社10社程度を選任する。

第10条　常任幹事会社の任務

常任幹事会社は、大会・対外試合の企画、運営を行う。

第11条　役員

倶楽部に下記役員を置く。

名誉会長	1名
会　　長	1名（委員の中から互選）
会長代理	3名以内（委員の中から互選）
顧　　問	若干名
委　　員	10名程度（常任幹事会社から各1名）

倶楽部の円滑な運営等につき会長の諮問に応えるため会長は名誉会長、顧問若干名を委嘱できる。

役員には「役員会員証」が発行され、役員在任中に使用する。

第12条　役員の任期

役員の任期は2年とする。

転勤等の理由により役員がその任務を果せない時は、委員会が速やかに後任の役員を選出する。後任役員の任期は前任役員の任期の残り期間とする。

第13条　役員の任務

会長は倶楽部を代表して、会務を統括する。会長代理は会長の補佐および会長不在の時に任務の代行を行う。顧問は倶楽部に対し、技術的・精神的指導、助言を行う。

委員は具体的に倶楽部の運営にあたる。

第14条　幹事会

役員全員により幹事会を組織する。幹事会には、三井上高井戸運動場が出席する。

倶楽部の意思決定機関は幹事会とする。幹事会は年2回開催し、大会の運営・コート利用に関する必要事項につき審議を行い、多数決により決定する。

第15条　公表

幹事会により決定された事項は加入会社に文書により送付するとともに、クラブハウス内に掲示する。

第16条　事務所

倶楽部の事務所は三井上高井戸運動場クラブハウス事務所内に置く。

第17条　対外登録

倶楽部は三井上高井戸運動場テニスコートを利用する団体として「浜田山ローンテニス倶楽部」を代表し、日本庭球協会に登録する。

第18条　その他

利用料金については別紙2（省略）にこれを定める。

テニスコート利用規定については別紙3（省略）にこれを定める。

【歴代役員】

年　度	名誉会長	会　長	会長代理	顧　問
昭和26～54	―	松平康邦（不動産）		小脇源治郎（物産S30逝去） 清水善造（物産S52逝去） 柏尾誠一郎（物産S37逝去） 岡本　忠（物産S30逝去）
昭和55～ 平成元	松平康邦 （不動産　H2逝去）	―	野上三男（信託） 宮城　淳（ゼネ石）	
平成 2～5	―	野上三男（信託）	母里昭一（石化） 宮城　淳（ゼネ石）	―
平成 6～8	野上三男（信託）	母里昭一（石化）	永山勝三（生命） 山本俊二（ゼネ石）	宮城　淳（ゼネ石）
平成 9～13		吉浦春樹（石化）	山本俊二（ゼネ石）	
平成14～16		栗岡　威（海上）	手島　宏（造船）	
現　在			手島　宏（造船） 小林立彦（信託）	宮城　淳（ゼネ石） 山本俊二（ゼネ石）